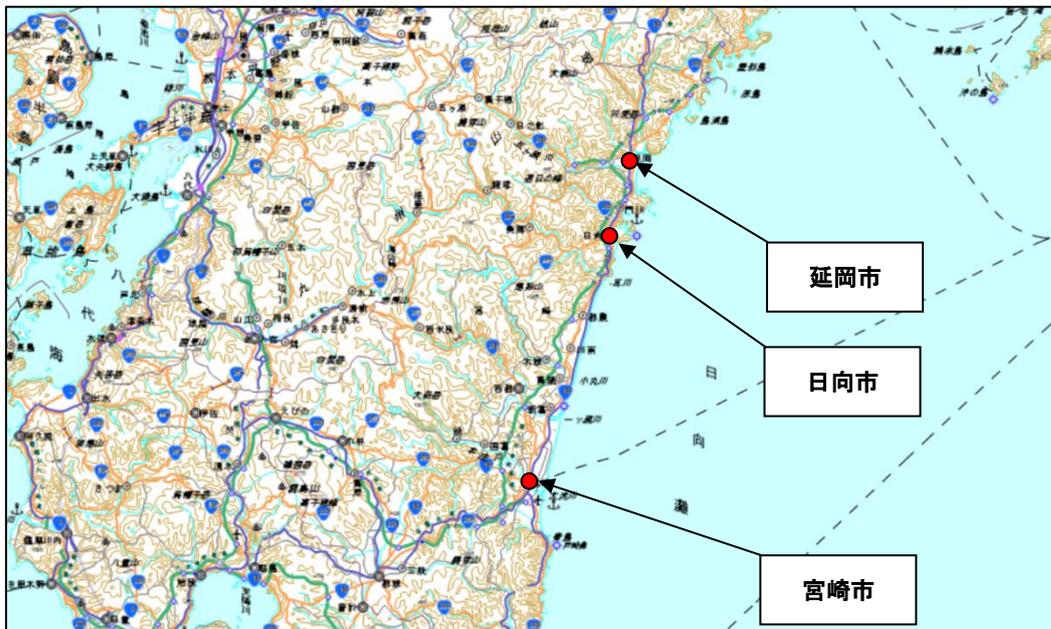


年号：1854 年

月日：12 月 24 日

災害名：安政南海地震 (M8.4) の概要

宮崎県延岡市、日向市、宮崎市位置図



出典：国土地理院

【宝永・安政大地震の発生後、津波が河川を遡上：延岡市】

- ・安政地震（安政元年・1854年）が発生した当時の内藤家文書「万覚書」によれば、「沖合至汐高ク、昨夕度々差引有之、汐色常躰無之」という海の状態から、「最寄地高之場所」へと非難したことが伺える。
- ・櫛津・土々呂地区では、通常より約 270 c m の水位上昇が報告され、地震発生直後から津波が押し寄せ、翌日の昼までに 16 回も津波が確認されるなど具体的な津波の状況を知ることができる。
- ・また、内陸部の北川村の五ヶ瀬川筋で約 90 c m の増水が確認されており、宝永地震と同様に、津波が大きく川を遡っていたことを確認することができる。

【図2】安政地震における延岡地域の被害状況



出典:延岡市文化課文化財係

【津波の高さを示す細島道路元票：日向市】

- ・宮崎県日向市は、江戸時代に天領であったこともあり、公開されている文献が少ない。
- ・そのようななか、日向市細島地区のコミュニティセンター横に建つ「細島道路元票」が津波の高さを記録している。
- ・現在の道路元標台座の高さは、安政元年（1854）11月5日に日向地方を襲った大津波の高さに合わせて作られていた元細島港役場の土台（石垣）の高さと合わせてつくられている。
- ・細島を襲った津波の高さは約1.8mあったとされる。



▲日向市細島コミュニティセンターの位置



▲細島コミュニティセンターと道路元票



▲海拔約2.6mとの標示



▲道路元票の全景



▲土台の高さまで津波が押し寄せた

大分県佐伯市米水津 浦代浦地区位置図



出典：国土地理院

【津波被害を石碑で伝える養福寺：浦代浦地区】

- ・大分県豊後水道沿岸地域は太平洋に面するリアス式海岸であるため、古くから津波の被害を受けてきた。その中でも宝永4年（1707年）10月28日の宝永地震、安政元年（1854年）12月24日の安政南海地震については津波に襲われたことが古文書に詳しく記されている。
- ・宝永地震は国内最大級の地震のひとつであり、東海地震と南海地震が同時に発生した。震源は紀伊半島沖の北緯33.2度、東経135.9度、マグニチュードは8.4と推定される。中部、近畿、中国、四国、九州で家屋が倒壊。津波は伊豆半島から九州まで及び、2万戸が流失、2万人が死亡したとされる。
- ・米水津湾に面した浦代浦地区には海岸から200メートルほど奥まった山腹に養福寺という古刹がある。地区に伝わる古文書「成松庄屋文書」によれば、宝永地震で「養福寺の石段を二つばかり残す」ところ（海拔高度11.5メートル）まで津波が押し寄せたと記録されている。
- ・宝永地震は国内最大級の地震のひとつであり、東海地震と南海地震が同時に発生した。震源は紀伊半島沖の北緯33.2度、東経135.9度、マグニチュードは8.6と推定される。中部、近畿、中国、四国、九州で家屋が倒壊。津波は伊豆半島から九州まで及び、2万戸が流失、潰家6万戸、4,900～2万人が死亡したとされる。・宝永地震の150年後、安政元年（1854年）には安政南海地震（推定マグニチュード8.4）が発生し、再度津波が押し寄せた。しかし、「地震あれば、必ず津波あるゆえ、気をつけよ」という古老の話を知っていたため、村人は高台へ避難し死者は老婦1名のみであった。
- ・養福寺には、平成23年3月の東日本大震災後、津波を風化させまいと「大地震・大津波の碑」が建てられている。石碑には成松庄屋文書の文面と共に「津波は何度も襲う、引き汐は猛烈、油断するな」と古文書の忠告が刻まれている。



▲浦津浦漁港から湾内を望む



▲浦津浦の集落



▲津波高さの標識整備状況①



▲津波高さの標識整備状況②



▲中央の高台にあるのが養福寺



▲養福寺へ上の階段①



▲養福寺へ上の階段②



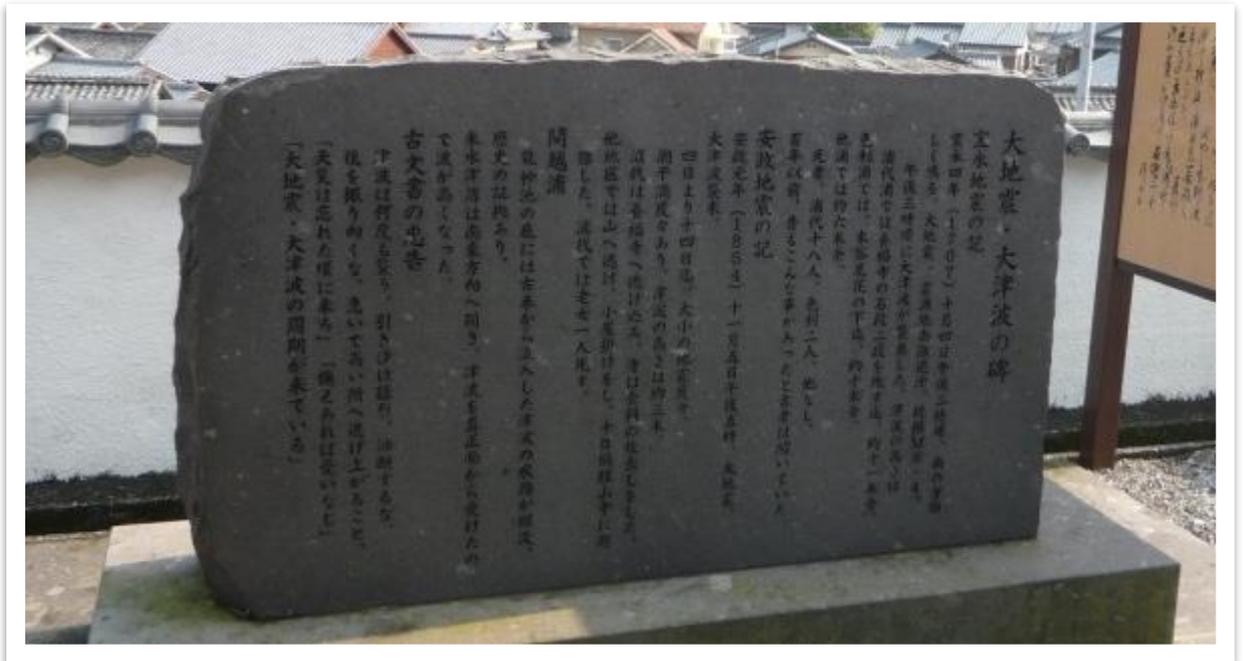
▲階段脇にある解説板



▲養福寺境内から湾内を望む



▲地区の津波避難所に指定されている養福寺の庭



▲境内に整備された石碑